

I君の場合

理事 北原 巖男

多くの学生が先進国への留学を希望します。でも彼は違った。アジアでも最貧国の東ティモールの大学を留学先に選び、勉強の合間に日本の文化や日本語を子供たちに教えるボランティア活動を決意したI君。

しかし、日本を出発する前の彼に対する私たち夫婦の印象は、線の細い今どきの若者だなあでした。

生活環境、教育環境等は、日本の比ではありません。彼は、その中で生活を楽しみ、自らを奮い立たせ、勉強や子供たちの教育に取り組み、問題の解決に当たって来ました。

一年有余後の再会。

あの線の細いI君は無く、見違えるほどに逞しい青年が目の前にいます。熱帯の陽に焼け、真っ黒になったひげ面を上げて、彼は熱く語ってくれました。

「今まで想像も出来なかった発見や感動、創り出し育てて行く喜びがあるんです！」

そんな彼は、突然失明の危機に陥ったこともありました。周囲の医療事情を知っている私たちは、直ちに帰国するよう進言。しかし、彼は極めて冷静に判断。シンガポールの病院に緊急入院

して手術を受け、そのまま東ティモールに復帰しました。

東ティモールでの勉強そして子供たちの教育に取り組むI君の気遣いが伝わって参ります。現在、目は順調に回復に向かっています。

今のI君は、第38期生のみんなのこれからの姿に重なります。

I君は、帰国後就活に頑張らなければなりません。

頑張れI君！

頑張れみんな！前へ！

「奨学」第38号/令和2年(2020年)
古岡奨学会第38期生、文集
公益財団法人 古岡奨学会刊